探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：江田島市立能美中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
江田島市立鹿川小学校	9	102人
江田島市立中町小学校	8	108人
江田島市立能美中学校	7	126人

（R5.12.1現在で記入）

1　研究の概要

（1）研究テーマ及び研究のねらい

①研究テーマ

児童生徒の探究的な学びが生まれる授業の創造
～小中９年間を見通した生活科・総合的な学習の時間の在り方～
〔小中連携教育の目標〕
ふるさとを愛し、ふるさとに学び、ふるさとに貢献する児童生徒の育成

②研究のねらい

小中９年間で育てたい資質・能力を系統的に育む生活科・総合的な学習の時間のカリキュラムの実践と普及を行う。

（2）資質・能力の設定について

児童生徒の実態と生活科・総合的な学習の時間で付けたい力と関連を図り、次の二つを設定している。

主体性	自ら目標を設定し、その達成に向けて考え、判断し、探究活動に取り組もうとしている。
伝え合う力	探究的な活動を通して、異なる意見や他者の意見を受け入れ尊重し、協働して新たな価値を生み出そうとしている。

（3）取組について

【探究的な学習の充実に向けての取組】

- 生活科・総合的な学習の時間全体計画を見直した。
- 育成を目指す資質・能力の系統表を見直した。
- 育成を目指す資質・能力を評価するためのルーブリックを児童生徒の実態に合わせて改善した。
- ＰＢＬの考え方を参考に、「本質的な問い」を立てた単元計
を開発し実践を行った。
- 各教科においてもＰＤＣＡを意識した授業改善を図った。
- 公開研究会を実施し、市内外に普及を行った。
- 開発したカリキュラム等を含むリーフレットを作成した。

【小中連携の取組】

- 公開研究会に向けて、推進協議会を適宜に開催し準備を行った。
- 校区全体会を行い、児童生徒の学びの繋がりや教師の思いを共有することを通して授業改善を図った。また、広島経済大学より講師を招き、本事業の取組の意義や校区の取組内容について価値付けした講話をいただくことで、公開研究会に向けて、教師のモチベーションを高めることができた。

【資質・能力の評価】

- 児童生徒の活動状況を観察しながら、適切なタイミングで振り返りを行わせることで、自己の目標や単元の目標の達成度を自覚させるとともに、児童生徒に次時以降の活動の見通しをもたせるファシリテートを行った。
- 昨年度設定した育てたい資質・能力の系統表を、児童生徒の実態に合わせて資質・能力を２項目に整理した。また、発達段階のつながりを見直し、文言を修正した。

【小中９年間の生活科・総合的な学習の時間で育てたい資質・能力】

	前期（小１～小４）		中期（小５～中１）	後期（中２～中３）
【主体性】 やる気 自主性 課題発見力	自ら目標を設定し、その達成に向けて考え、判断し、探究活動に取り組もうとしている。			
	身近な人・もの・ことに進んで関わり、意欲をもって学習したり生活したりすることができる。	課題を解決するために、自分から進んで、身近な人と協力しながら行動している。	課題を解決するために、自分から進んで、身近な人と協力しながら行動するとともに、解決の見通しをもち、他者の考えを受け入れよりよい解決を目指している。	課題を解決するために、自分から進んで、身近な人と協力しながら行動するとともに、適切に解決への見通しをもち、他者の考えを受け入れ、探究的に解決を目指している。
【伝え合う力】 表現力 傾聴力 対話力	探究的な活動を通して、異なる意見や他者の意見を受け入れ尊重し、協働して新たな価値を生み出そうとしている。			
	自分の考えや思いを、言葉・絵・動作・劇・資料によって、相手に伝えたり、自分の学習を振り返ったり、自分の学習を振り返ったりすることができる。	伝える内容が、相手に分かりやすく伝わるように、目的に応じて資料を作ったり、複数の資料を組み合わせたりして表現することができる。	目的や相手に応じて、伝える内容を吟味したり、資料を再構成したりして、根拠を明確にして適切に表現することができる。	目的や相手に応じて、精査した情報を吟味したり、資料を再構成したりして、根拠を明確にして適切に表現することができる。

2　実践事例

①中町小学校の実践

第３学年単元「えたじまん　さぐり隊
～えたじまん発見☆江田島大好きプロジェクト～」

３学年から始まる総合的な学習の時間の最初の単元である「わくわく地域発見」から発展した単元である。江田島に住む人や働く人との出会い、江田島の様々なよさを知るためにものやことについて、活動や体験することを通して、江田島のよさを実感できる。また、それらを創り、育て、守る人々の存在や思いに気付くことができる単元である。周囲の人や他地域の人に自慢したくなる話等、相手意識や目的意識をもつことに必然性が出てくる単元であり、伝え合う力を育成することができる。さらに、地域の一員として生活し、自分のふるさとを愛する態度を育てることができる単元である。

[探究的な学習による効果]

単元を貫く問いとして、「えたじまんって、どんなもの？」を設定し、他教科で学習した力を生かし、カリキュラムマネジメントをしながら、教師も児童も単元構想図を共有して主体的な活動を行うことができた。

児童自ら課題解決できるよう単元にストーリー性をもたせ、児童が見つけた問いが必然性のあるものとなるように単元を構想した。この単元では、児童が旅行会社を作って、えたじまんツアーを考えていくという設定である。それによって、プロジェクト型の総合的な学習が楽しいと思うことができ、持続可能な学習を進めていくことができた。

「えたじまん」とはどんなものか、自分たちで定義することから始まり、それを確かめるために、見学や体験、インタビューを通して、児童は10カ所18名の地域の方とつながった。

単元終末では、児童が自ら課題を見つけ、解決していくにあたり、地域に密着した様々な人とのつながりから、郷土愛や感謝の気持ちをもつことができた。

単元構想図は、授業を重ねる度に児童の思いによって加筆・修正した。単元のゴールは、当初、えたじまんを知りたい、社会科で学習した江田島のマップを作って周りに見せたいという単発的な個人の思いだったが、えたじまんマップを作って、みんなに江田島に来てほしいという協働的な思いに変わり、他者に発信したいという気持ちが高まった。

[児童の単元の振り返りより]

○　はじめは、「えたじまん」が何か分からなかったけれど、市役所の人に聞いたり、体けんをしたりして、分かるようになりました。たくさんの人と出会い、つながりました。
○　「えたじまん」をみんなで話し合って、自分たちにとっての「えたじまん」をリーフレットやスライドにまとめることができました。国語や社会で学習したことを生かせました。
○　「えたじまんツアー」を自分たちで考えて、活動や体験をすると、江田島は楽しくて、わくわくするところだと分かりました。これから、たくさんの人に来てもらいたいと思いました。

②鹿川小学校の実践

第６学年単元「Catch Your Dream!」

本単元は、江田島を故郷とする子どもたちが、「今の自分にできること」を考え実践することを通して、江田島の魅力を再認識し、江田島の価値に気付くとともに、協働的に問題を解決することを通して、地域と関わる意義や人生を通して故郷と共生する意味、自分自身の存在意義や価値を自覚することに繋がる単元である。

[探究的な学習による効果]

今年度は、「体験活動の充実」を指導改善の手立てとして、学習を進めた。

『課題の設定』では、テーマに関する現状に出合わせることで、「課題を自分事として捉えられる」ようにした。江田島市の

統計資料から「このままでは、江田島の人口減少が進み、自分たちの故郷がなくなってしまうかもしれない」という課題に気付き、「故郷を守るために、人口減少に歯止めをかける取組につなげたい。」という思いをもつようになった。

そのためには、江田島の魅力を、県内外の多くの人に知らせることが必要であるが、児童実態として、「江田島の魅力」を深く知らなかったため、「体験活動」をできるだけ設定することにした。「どんな体験をしたら、江田島の魅力を深く知ることに繋がるか」を考えさせたところ、「マリンスポーツ」「陶芸」「自給自足」について体験することになった。それぞれの体験活動を通して、江田島の魅力を知識ではなく、肌で感じたことで、自分の言葉で魅力を伝えられるようになっていった。また、繰り返し体験活動を行ったことで、魅力の共通項にも気付くようになった。「体験活動」を重視したことで、思考の視点が明確になったり、思考に深まりが出たりするなど、『情報の収集』と『情報の整理・分析』の質が向上したといえる。

さらに、自分たちが体験したことを魅力として伝えるため、『表現・まとめ』にも、意欲的に取り組むことができていた。また、伝える相手や目的も、『課題の設定』の段階で児童と明確に共有していたため、主体的に取り組むことにつながったといえる。

［児童の単元の振り返りより］

> ○　自分たちの故郷がなくなるかもしれないので、今の自分たちにできることを取り組みたいと思った。
> ○　体験活動で、自分の知らない魅力にも気付けた。
> ○　移住者が求めている魅力は、人によって違うから、どんな魅力を伝えるか、よく考えないといけないと思った。

③　能美中学校の実践

第３学年単元「江田島の発展を目指して～自分たちにできる地域貢献とは？～」

江田島市のもつよさを見出し、抱える課題を解決するために多様な他者と協働しながら中学生の視点で自分たちにできることを考え実践することを通して、ふるさと江田島市に誇りをもち、地域の方々と持続可能な真の貢献について語り合い、将来自分が地域にどのように関わっていきたいかを考え発信する。

［探究的な学習による効果］

単元を貫く問いとして「今の自分たちにできる地域貢献とは？」を設定し常に活動を振り返ることで、ブレの無い活動を行うことができた。自分たちの思いだけで課題解決するのではなく、地域内外の江田島市に関わる方たちの思いや、江田島市の現状を調査する時間を確保した。これにより、客観的な視点をもち、生徒一人一人が学習課題を考え、必然的な課題解決を模索することができた。また、生徒の思いを尊重し班づくりを行うことで、10班（３～4人）それぞれの活動への意欲を高めることができた。

「地域の方と協働した貢献」というミッションを教師が与えることで、地域の団体や地域の方々と協働し、ＰＤＣＡのサイクルが自発的に複数回繰り返された。また、地域の方と協働するために、授業以外の時間で、放課後や休日の多くの時間を活動時間として含めた計画を立案し、教師がいない場で生徒自ら活動する時間が多くあった。そのため、教師に活動報告することが必然となり、インプットとアウトプットがこれまで以上に繰り返された。このような活動を推奨することで、生徒がより地域と密接に関わりながら、活動の調整、改善を行うことに繋がり、主体的な学びが促進したと考えられる。

［生徒の単元の振り返りより］

> ○　学び方、考え方を比較するには、まず自分の意見をもつことが大切だと思います。僕はこの１年間、まず自分の意見をもつことを大切にしてきました。そうして、自分と他人と比較することで自分の意見や考えをより良くすることができました。
> ○　僕はこの活動をするまで、Yellさんやフウドさんのような江田島のために何かをしている人のことを全く知りませんでした。この活動を始めてから、そういった人たちと関わるうちに、かっこいいなと思い、自分もやってみたいとすごく思ったし、協力したいと思うようになりました。

【個に応じた指導の充実】

- 一人一人の生徒の興味関心について丁寧に把握し、個々の児童生徒に応じた「個別の問い」をファシリテートすることで、「子供と先生」「子供と子供」をつなぎ、子供達の将来の生き方につながる「本質的な問い」と子供をつなぐことができた。
- 担任以外に副担任や研究推進リーダーを配置することで、Ｔ・Ｔの活用や学習形態の工夫により、一人一人の学びに応じたきめ細かな対応を図ることができた。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

- 発達段階に柔軟性をもたせた系統性のあるルーブリックの改善ができた。
- 地域人材との連携により、地域との協働の促進を図れた。効果的なカリキュラム・マネジメントを通して、単元構想の工夫ができた。
- 発展的な「探究のサイクル」を繰り返すことで、児童生徒の思考力、実行力を高めことができた。
- 一単元の中で、児童・生徒が「探究のサイクル」を複数回行える単元を実践できた。

児童・生徒アンケートでは、小学校の「自分の考えを発表するときは、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や話の組み立てなどを工夫して発表している。」と中学校の「自分の考えを場面や状況に合わせて、分かりやすく相手に伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫している。」において、全体の肯定的評価が80％以上を示し、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」広島県77.9％、全国72.6％（令和５年度全国学力・学習状況調査　児童生徒質問紙中学校調査結果）を上回る結果であった。

（２）課題

- 児童生徒の実態や思いに合わせた新たな単元づくりへのチャレンジ。
- ルーブリックの質的向上。
- 来年度以降の持続可能な校区の組織づくり。

「相手を想定した工夫をする力」は身に付きつつあるが、今後も継続して効果的な表現方法の工夫の吟味が必要である。

《各校の令和５年度全国学力・学習状況調査結果より》

中町小学校の結果を見ると、国語は言葉の特徴や使い方に関する事項、算数は図形の意味や性質について理解（中町小46.2％、広島県62.9％、全国59.8％）、図形について判断して、その理由を言葉や数を用いて記述すること（中町小15.4％、広島県20.5％、全国20.8％）に課題が見られる。全校で実施した標準学力調査においても、語彙力に課題があり、言葉を使って組み立てを考えながら、分かりやすく書いたり、話したりすることに課題が見られる。

鹿川小学校の国語の結果を見ると、「情報の扱いに関する事項」について鹿川小52.4％、「書くこと」について鹿川小19.0％と共に低く10ポイント程度下回っている。標準学力調査（12月実施）においても、同様の項目に関する問題の正答率が目標値（東京書籍が設定した数値）よりも低く、「情報と情報との関係を考える力」と、「目的に応じて適切に書いて表現する力」に課題があるといえる。

能美中学校の国語の結果を見ると、「情報と情報との関係」を問う設問の正答率が能美中53.3％、広島県65.4％、全国65.1％と10ポイント以上下回っている。このことから、情報を収集する力は身に付きつつあるが、「情報と情報の関係を読み取る力」や「必要な情報を抽出する力」に課題があると考えられる。

（３）今後の改善方策等

- 小中９年間で育成したい資質・能力の系統表を継続して活用する上で、児童生徒の実態に応じて見直すとともに、系統性をもたせたルーブリックの改善を図る。
- 小中９年間の効果的なカリキュラム・マネジメントを行う上で、年間指導計画の見直しをする。
- 児童生徒の興味・関心を基にした学習課題の選定を行う。
- 校区の教職員が継続的に連携・協働するため、校区の管理職と研究主任を中心とした組織を設置する。